

5 シンポジウム：研究フォーラム B-7 分科会

日本の伝統・文化再発見！ ～ 「感」じて「動」く和の心と技

平成 22 年 12 月 27 日

■講演：「間」は「魔」に通ず ～日本文化の深奥～ 演劇評論家 河内 厚郎



「気」は「機」なり、「間」の妙味にこそ日本文化の特色が発揮される。日本のプロ野球に見る、投手のインターバルや、サインの「間」は、アメリカのベースボールには見られないもので、能や歌舞伎など、伝統芸能に通ずる面がある。相撲にも立ち合いに到るまでの長い仕切りという「間」があり、ゴルフにも芝生を歩く「間」がある。

この「間」は、農耕民の、受動的で、忍耐強い身体動作の蓄積がもたらしたとも考えられる。牧畜民とくに遊牧民には見られないものだ。

生活の場である部屋を間（ま）と呼び慣わし（居間・客間...）、「間がよい・わるい」「間を持たせる」「間を置く」「間に合わせる」「間が抜ける」「間を外す」...あるいは、「時間」「空間」「世間」「人間」という具合に、対象との距離感を意識したりする際、常に「間」を添えてきたのが日本文化であり、芸能の世界においては、「間」は「魔」に通ず、という奥深い言葉もうまれた。「主体」と「客体」を明確に分離せず、両者の関係性のほうに重きを置くのが、日本語ならびに日本文化の特色といえる。

■落語：阪南市立上荘小学校児童

			
動物園 (太田家あみっち)	子ほめ (タ貴亭きみどり)	狸の賽 (桂橋りさびん)	犬の目 (森田家コーン)

■研修の報告 体験型ワークショップ研修編の報告

大阪府教育センター 主任指導主事 八巻 敏幸

実践発表

音楽	：大阪府立夕陽丘高等学校	谷廣 進一
書道・書写	：大阪府立生野高等学校	松岡 千雅子
美術・工芸・図画工作	：大阪府教育センター指導主事	仲谷 浩

■まとめ 「今後の方向性について」

大阪府教育センター 指導主事 恩知 理加

6 「伝統・文化に関する教育」研修に係る連携協議会

一研修の評価及び改善

【期待される開発成果】

(1) 学習プログラムの開発

実演家等、外部人材と連携し、「伝統や文化に関する教育」を教育課程に位置付け、日常の授業の中で有機的に生かすことのできる学習プログラムの開発を行う。

(2) 開発したプログラムの普及

プログラム内容と実践事例を、指導マニュアルとして収録し、研究発表大会や Web 等を通して府内の芸術教育にかかわる指導者や子どもたちに普及する。

(3) 開発後の連携協力

大阪府教育センター、関西舞台芸術研究所研修開発グループが連携し、「伝統・文化に関する教育」学習プログラムの普及・振興、授業における効果測定を行い、継続的にカリキュラムづくりを進める。

7 研修の成果

本研修は、本事業の趣旨に基づき、教員が教員対象の研修を受講し、その後研修を受講した教員が学校にて、受講した研修内容を実際に生徒対象に実践するという形態で行った。

(1) 研修編アンケート調査

7 研修（和太鼓、箏、能・謡、絵手紙、陶芸、書写、刻字）の平均受講者 259 名による実施前および実施後のアンケート調査結果から

- ・伝統・文化についての興味・関心度は、受講前に「やや高い、最も高い」を合わせて 53%であったが、受講後は 95%になり、実際に体験することによって、興味・関心度が高くなった。
- ・伝統・文化についての基礎知識は、受講前、「やや高い、最も高い」11%から、受講後は 66%となり、また、基礎的技術・技能は、受講前は「普通以下」が 89%を占めていたが、受講後は反対に「普通以上」が 91%となり、1 日あるいは 2 日にわたる受講により、基礎知識が深まり、基礎的技術・技能が身に付いたことがわかる。
- ・伝統芸術・文化全般についての興味・関心度や認識・価値観は、受講前、受講後共に、8 割以上が「普通、やや高い、最も高い」と答えているが、自由筆記欄に「関心はあるが、そのような機会がない、少ない」という記述が多かった。教師をとりまく環境の中でも、伝統・文化に関する情報をキャッチする機会が少ないことがうかがえる。
- ・受講した伝統・文化の①親しみやすさや身近さ、②良さや魅力、③基礎知識、④基礎的技術・技能を、子どもたちに指導することができるか、という問いに対して、受講前には、「ややできる、できる」が平均 12%であったが、受講後は 66%になり、実際に体験して身に付いたことによ

り、指導する自信と意欲が高まったことがわかる。

- ・受講した伝統・文化を指導することによって、子ども達に身に付くと考えられることは、「伝統や文化を愛好する心情」「表現力・発信力」「自己肯定感」の順で高く、教師自身が、伝統・文化を学ぶことの意義を認識していることがうかがえる。

(2) 実践編アンケート調査

研修を受講した教員が、実際に自校にて生徒対象に行った実践編（能・謡、箏、刻字の全員 421 名）のアンケート調査結果から

- ・受講した伝統・文化について事前に知っていた生徒は2%以下であった。ほとんどの生徒が、能や箏、刻字についての知識がなく、生徒たちの環境の中に、いかに伝統・文化に関わる機会が少ないかがうかがえる。しかし、そんな中、「興味があったか」という問いに対しては、52%の生徒が「興味があった」と回答し、伝統・文化に対する興味・関心度は高いことがわかる。
- ・受講後、「この授業を受講してよかった」と回答した生徒は94%にのぼった。受講して良かった点では「親しみを感じた」が突出して高く、次いで「講師が良かった」「自分の感性や能力に新しい発見があった」という項目が高かった。また、受講した内容の理解度については、92%が「よく理解できた、少し理解できた」と回答し、実際に、伝統・文化を体験して学ぶことにより、興味・関心度は高くなり、理解度も上がる事がうかがえる。
- ・受講した内容を理解できなかった点としては、「内容が難しかった」「時間が短かった」という回答がほとんどで、伝統・文化に接する機会が少なく、情報不足などによる知識・体験の少なさや、継続的に受講できる機会が必要であることなどがうかがえる。
- ・実際に身に付いたと感じた点は、「表現力・発信力」「伝統や文化を愛する気持ち」「知識・技能」「伝統・文化の価値を理解する力」の順で高く、短い時間であっても、体験する機会があることによって、伝統・文化の心や精神を培うことができると考えられる。
- ・今後、「このような授業を受けたいですか」という問いに対して、86%の生徒が「はい」と回答している。また、「この授業で体験したことをさらに深め(広げ)ていきたいですか」の問いに対しても、71%の生徒が「はい、そう思う」と回答し、そのうちの94%は「体験や感動を家族や友達など、周りの人に伝えたい」「趣味(習い事、鑑賞者など)にしたい」という回答であった。短い時間であっても、体験して学ぶことによって、伝統・文化に関する興味は深まる事がわかる。

(3) アンケートまとめ

子どもたちに「伝統や文化」の良さを気付かせ、継承・発展するための教育を充実させるためには、「体験して学ぶ」ということが一番重要である。学校の授業で「体験する」ためには、まず、学校の教員自身がその知識や技能を体験し、そのよさを実感することにより、そこで得られた感動が、子どもたちに伝えていく熱意となり、実際に伝統・文化の授業を行っていくことができる。

アンケートの結果からも、教員自身が体験することによって、知識や技能はもちろんのこと、子ども達に伝えたいという熱意が身に付いたことがわかる。しかしながら、長い年月で継承されてきた伝統・文化は、教員が短時間で身に付けたことだけでは十分ではなく、プロのアーティストによる本物にふれさせることも必要になるため、教員（学校側）とアーティストとの連携によって伝統・文化の授業を実施していくことが重要となる。